

飛耳長目

通巻191号 令和1年10月1日発行

「開頭」昭和29年3月5日刊
四月号通巻第77号

民族における分裂症的傾向

島国の宿命三々

森 信三

一

もし何人かゞ私に向って「現在わが国において最も憂うべき現象はどこにあると考えるか」と問われたとしたら、私は直ちに次のように答えるであろう。それは「根本的には民族としての主体性の欠除であるが、その現象形態としては、民族のあらゆる部面に見られる分裂症的傾向として現われている」と。ではこのような分裂症的傾向の根本原因はどこにあると言うべきであろうか。民族のこのような分症的傾向を、単に主体性の欠除から惹起（じゃつき）せられると説明することは「勿論かつていえないとは言えないが、同時にそれでは、言わゆる紋切型の形式的な説明であつて、真の説明にはならないであろう。というのは、その場合には、さらに「それでは、その主体性の欠除という現象は一体何処にその原因があるのか」とさらにその原因を追求せざるを得ないからである。

かくして私はこの問題に対しては、もっと別の方面から考察したいと考えるものであり、そしてそこに求め得られるものは結局「島国の宿命」ともいうべきものではないかと考えるのである。即

ち私の考えるところでは、わが民族のあらゆる部面に見られるもろもろの分裂症的傾向の最深の因は、結局わが国が島国である処に因由するところである。ここに分裂症的傾向というは、たとえれば、進歩革新を標榜する人々の民族主義的言説と、現在の政権を握っている人々の汚職的頹廢現象の如きはその最たるものであるが、近く教育界に例をとるも、本国たるアメリカでさえ一二の例外的地域以外には実施せられていないというコア・カリキュラムのような極端な学説が、民族の有する教育学者のはとんど全部をあげて狂奔的に唱導せられる一方、現場の教師のうちには、教科書さえも十分にはこなし得ない助教の人々が少なくないと言つた現象の如き、さらにまた今一つ別個の事例をあげてみれば、カメラと言えば余裕のないサラリーマン階級でも、無理算段して直ぐに何万円という中級乃至高級品を求めたがるが、それにも拘らずその写す写真は、米人が七八千円級の写真機で写したのものにも及びえないが如き等々、いちいち挙げたら実に際限もなくわれらの周囲に山積している。

二

ではこのような民族における分裂症的傾向の深因を、何故私は島国にあると言おうとするのであろうか。竹内好氏は、今日の時代にあつては一名著ともいふべきその「現代中国論」において、このような分裂症的現象の原因を、畢竟（ひっきよ）

ネット検索 森信三先生と修身教授録

う) 天皇制に基づくものとしていられるようである。部分的には私も、そうした面のあることを否むわけで、は決してないが、しかも私には、より深い根本的な原因は、結局わが国が島国であるという点にあるかと思われるのである。

では民族のあらゆる領域におけるこのような分裂的傾向の深因を、結局島国性にありとするのはそもそも何故であろうか。私はここに島国のもつ大陸よりの遮断感、断絶感の意義を重視したいと思うのである。言うまでもなく島国性とは、大陸よりの国土の遮断と断絶によって成立する。ところで遮断と断絶は、その恢復復元を、無意識のうちには内包せしめているといわねばならぬ。そうして普通一般の人々にあつては、このような復元

恢復への希求は、意識の深層的底部にたゞ眠り呆けていると言つてよいが、民族のもてる知的優秀分子にあつては、このような復元恢復への希求は、意識的挙動として現われ、たとえそれが十分に自覚的ではないにしても、少くとも「本能的希求」として発現するを常とする。即ち外来文化への異常なる憧憬希求となつて現われるのである。

かくしてそこに生ずるものは、民族における優秀分子の外国文化に対する異常に過敏なる病的希求憧憬となるのであつて、それはかの獄中の囚人の聴覚ないしは諸感能が、外界の刺激に対して病的に過敏なのと、相対比せらるべきであろう。同時にこのことは、その外来文化の摂取をして模写

ならしめ、それはさらにその多面性と瞬間性とを招来せしめることとなる。即ち模写的であるために深く民族の生命に根を下すに至らず、いつまでたつても民族の現実には根を下さずに、次から次へとその模写の対象を変えてゆくのであつて、このことは教育学会が、悪しき意味において、最も典型的であるといつてよいであろう。じつさい明治維新以後八十年間における教育学説の送迎ほどに一国の学問界が根なし草的現象を露呈した例は、全世界にもその対比を求め難いのではあるまいか。

三

だがこのような現象はひとり教育界のみでなく、根本的にはわが民族のあらゆる領域に見られることであつて、一々ここに列挙するまでもあるまい。否このような現象は民族の歴史を顧みるとき、随所にこれを見出しうる現象と言つてよいであろう。古くは遣唐使さかんなりし頃より、近くは明治維持以来、現在に到るまでのわが民族の歩みにおいて、そこには他の大陸的諸民族にはどうもい見られないような、外来文化への異常なる憧憬と希求とが見られるのであつて、われわれはそのような希求の凄壮(せいそう)とも形容すべきものを幕末期における蘭学者の群に見出すことができる。

否そればかりかあの世界的にもその類例の少いといわれる三百年の泰平を保てる徳川時代におい

てさえ、儒学者たち……それが常時におけるほとんど唯一の知的優秀分子といつてよかつたのであるが……は、海を距てた支那大陸の文化に対して無限なる憧憬思慕の情を寄せ、漢土の現実をば、文字を以つて表現せる儒教の諸典籍の表現そのま

まが、如実に実現せられているかの如き錯覚をもつていたという誠に笑えぬ深刻な悲喜劇を演じていたのである。

儒者と言えば、常時のわが民族を代表する民族の叡知といつてよいわけであるが、然るにそれらの人々が何故そのような大きな誤りを犯したのであるうか。言うまでもなく端的には、それらの人々が現実の中国本土を知らぬが故であり、随つてその得た処の知識内容はすべて書籍によれるものだからである。「百聞は一見に如かず」の諺も示すように、現実に中国の本土を知りさえすれば、何ら叡知の所有者でなく、平々凡々の一般庶民といえどもその地の実状況を把握することはさして困難でないが、身その土を踏まずしてその地の実状をたゞ書物典籍によつて知ろうとすれば、如何なる叡知者と言えどもそこに誤謬と錯誤に陥ることのあるは極めて当然と言わねばなるまい。

四

ところでわれわれはこのような自明の真理を実証する生まなましい一実証を、最近の民族の歩みの上にもつている。それは昨冬中共よりの無数の引揚げ帰還者のあつたことによつて、わが民族の、

中共への認識が飛躍的に増大したと共に、それを契機としてわが国の、進歩革新の陣営に属する人々の考え方の上にも、今や巨大なる変化が招来せられつつある現象である。

なるほど文献としては、毛沢東の著書が我が国に伝えられたのは、ずっと以前からのことであろう。現にその方向の消息には最も疎い私のような者でも、毛沢東の「新民主主義論」の繙読をすすめられたのは、確か昭和二十三年のことだったかと記憶しているほどであるから、ましてこれを専門としている人々には、毛沢東の文献は早くより目にふれていたに違いない。がそれにも拘らずわが民族が、中共の実態の異常なる卓越性を、民族の体を通しての実感として把握していたのは、結局前述のように昨年度の無数の無名の中共帰還者を迎えて以来のことに属する。

同時に注目すべき現象は、それを契機としてわが国の革新陣営に属する人々の態度の上にも巨大なる変化が招来せられ出したらしいということである。もっともこのように巨大な戦術的転換を、最も勇敢に敢行したのは、私を見る処では日本共産党であるかと思われ、日教組を初めとして一般ジャーナリズムの転換は日共ほどに鮮かではない。思うにこの現象は、日本共産党は、日教組や、

況んやただ文筆の上に衣食している一般ジャーナリストに比して、その民族に対する負荷感に於いて、著しくその浅深の度を異にする処から来てい

ると言つてよいであろう。がそれらの論議は何れにもせよ、とにかくわが国の思想界が、無数無名の中引揚げ者の帰還を機として、今や巨いなる転換を開始し出したということは、まことに注目に値する事柄であると思う。即ちその転換とはこれを一言でいえばいわゆる公式主義よりの脱却であり、新たな即実的立場への移行である。

五

ところでこゝに注意を要することは、このような元来即実主義的であるべき転換そのものが、またもやそこに中国を以つて天国の如くに錯覚する一偏的傾向を招来する気配がないとは言えぬことである。

中共に対しては、私は勿論部分的には色々な無理や犠牲も払われているとは思ふが、しかしとにかくにそれのもつ意義は、漢民族四千年の歴史の上にも比類少きものといつてよいではないかと思う。たとえばそれは文盲克服としての識字運動一つのうえにも明かだと私には思われる。何が「善政」だといつても、一般民衆の心の眼を開くほどの「善政」は他になく、そして文字を教えるということは、「心の眼を開く」開眼手術といふべきものだからである。また大都会にハエが見られなくなつたとか、あの発着時刻表なく、一時間や二時間位遅れるのは何ら怪しまれなかつた汽車の発着が、今や我が国以上に正確になつたという事など、二三の事例に徴（ちょう）しても、如上の卑

見解を変えるわけにはいかなないのである。

だがしかし前にも記したように、ここにもまた注意を要するものがないわけではない。即ち中共を以つて絶対化しないということである。その変革が巨大であればあるほど、部分的にはまたその裏面には反理想的なる事象の生ずるは不可避であつて、このような制約は、何時、いかなる時代、如何なる民族にあつても免れえない「地上的制約」といふべきである。勿論かくいうは、このような制約そのものをまた絶対化して固定すべきではなく、つねに制約の軽減と除去に向つて努力すべきは言うをまたない。

これを要するにわれわれにとつて重大なことは、今日の段階に至つてもなお中共を感情的に拒否する一部固執な人々と、他方にはまたこれを地上の天国視するような甘さとが相対立していることのような民族の分裂症的傾向を、今こそ克服せねばならぬ時だと言ふことである。それには何よりもまずこのような民族の分裂症的傾向こそ、われらの民族のもつ最大最深の病患であり脆弱点であるといふことの自覚と、さらにこのような欠陥のもとづく処が、根本的にはわが国の島国性に存することへの民族全体の認識を深めることであると思う。おそらく今後国民教育における最大の課題としては、積極的には現代のような困難な国際的情勢下にも拘らずわれらの民族が将来人類に対して負荷すべき民族の使命を少くとも方向的に指示

することであり、今一つ消極的には、このような使命を果遂（かすい）する上で最大の支障となる如く民族の分裂症的疾患の指摘並びにこれが克服の方途とを、種子蒔き時に教えておくことである。

ビキニの死の灰（微言）

森 信三

○アメリカが、ビキニ諸島の辺で水素爆弾の実験をして、その際の「死の灰」が、わが国のマグロ漁夫たちにふりかゝったという事件は、最近の世界の出来事のうち重大な事件はないと言つてよからう。

○この事件の示唆するもの、ないしはそれによつて現に生じ、また今後生じるであろう事柄は実に重大であつて、ある意味では、現在における全人類の思索の中心は、まさにこの「ビキニの死灰」に焦点せしめるべきだと言つても決して過言ではあるまい。

飛耳長目（ひじちようもく）

○それらの中の第一は、人類は今や「原爆廃棄」と共に、さらに百尺竿頭一步を進めて「全軍備の即時放棄」の時期に到達したということ、何ものにもまして深く人類の五臓に感ぜしめたということである。

○戦争の廃止とか、地上の軍備の即時撤廃の主張は、終戦以来小誌がつねに一貫して唱導してきた処であるが、今やこの人類の当面する最も深刻な真理に、人類全体が現実的に直面し出したことが、事実によって実証せられたということである。

○それについても考えさせられることは、米国が、

われの敗戦と共にその全軍備を撤去せしめ、強いるに「不戦憲法」を以つてしながら、しかもそれから十年を出ない今日、再軍備を強制すると共に、そのための最大支障となつてゐる処の、かつての日自らが強いた「不戦憲法」の変更を、強制せんとしつゝあるということである。われらに良心があり、主体性のある限り、われらは、米国の犯さんとしつゝあるこの誤謬と罪惡とを断じて許すわけにゆかない。まして原子兵器の威力が文字通り人類をせん滅せしめることを自らが実証しつゝあるにおいておやである。

○なおそれについて誤解のないために附記しておくが、このように言うことは、何も米国のみを悪くして、その対立者であるソ連を良しとするの謂いでは決してないということである。けだし敗戦により民族として魂の眼を開かれたわれわれは、今日如何なるものに対しても、その批判の眼を閉じるわけにはゆかないのである。

○自由を説きつゝ内部に民族その他の矛盾を包蔵せしめてゐる米国と、平等を標榜して少くとも国内では民族間の差はつけないが、一党の独裁によつて大衆の自由の確保せられていないソ連と：われわれはその何れをも無批判、無条件に肯定するわけにはゆかないのである。

○たゞここに忘れてならない一事は現在われわれが直接その重圧を受けてゐるのは米国であつてソ連ではないということである。それ故に仮に現在自分が身を置くとしたらソ連よりも米国の方が多少はまだましだとしても、われわれとしては対米批判の眼を閉じるわけにゆかないのである。

○注目を要することは、今日ビキニの「死灰」並びにその後、この事件に対してとつた米国の態度によつて、戦後のわが国において、初めて民衆による対米批判が開始せられたという一事である。これまでジャーナリズムの上で、文字の上で行われた反米批判は、米国のためにさまで恐るべきものではなかつたと言つてよいであらう。だが、今回の「死のマグロ事件」によつて開始されんとしつゝある「対米批判」は断じてそれと同一視するわけにはゆくまい。何となればそれは一般庶民がその身にこたえた処からくるものだからである。

あとがきに替えて

森信三先生の仰有る「分裂症的傾向」は最終講である。日本民族が外来文化に対して、本能的な異常な病的希求憧憬の傾向があるという。これは今日もなお依然としてその傾向を否定しがたい。が、すこしづつ日本民族の矜持や誇りの民族感情は芽生えつつあるという観測もあるやに思う。外来文化に対して一度包摂してその値打ちを確かめる土壌は生じつつあるかと思う。65年前の言説もなお参考にならう。（30日二繁）

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話0744-4513422

Email:hij3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushin